



月刊バイブル（世界のベストセラー、聖書のトリビア）

第24号

発行：レムナントキリスト教会

価格：100円（送料込みで200円）

〔目次〕

- ◎聖書からのメッセージ：「神からのとがめを受ける」エレミヤ
- ◎高ぶりを打ち砕く：進化論の誤り20「進化論を否定する証拠は採用されない」
- ◎聖書と日本語「豚に真珠」
- ◎詩篇を読む：「助けを必要とする人に、手を伸ばしてくださる神さま」
- ◎キリストを信じた体験談：「不思議な助け」フィベ
- ◎聖書に関する偉人のことば：三笠宮崇仁殿下
- ◎ご案内：聖書贈呈

<聖書からのメッセージ>

「神からのとがめを受ける」

by エレミヤ

本日は「神からのとがめを受ける」という題でメッセージしたいと思います。ある人は神のとがめと怒りの下で人生を歩む、しかしある人は神からのとがめを受けたりせず、神からの祝福と愛顧の下で、人生を歩む、このことを見ていきたい、と思うのです。

テキスト：ヨハネによる福音書 3:18 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれている。

人は不幸になるより、幸福になることを求めます。このことは当たり前ののですが。私が住んでいる府中市にも大きな神社があります。そこを歩いて見るとおみくじのコーナーがあります。元旦などにこのくじを引

いて、人は自分の今年の運勢を確かめるのでしょ。吉や大吉が出れば「今年は良い年になりそうだ」と思うでしょうが、逆に凶や、大凶などを引いてしまった暁には「一体今年は何んな不幸な年になるのやら」と不安に思ってしまうでしょう。

確かに色々な人の人生を比べてみると、吉の人生もあれば、凶としか思えない人生もあります。順風満帆の人生もあれば、次から次へと不幸が押し寄せてくる人生もあるので。これらの人生の不幸は避けられないものなのでしょうか？我々が不幸な人生から逃れ、幸せな歩みに入るためにはどうすればよいのでしょうか？大吉が良く出るという神社にお参りすることがもっとも良い解決策なのでしょうか？上記聖書の箇所は、私たちの人生において幸せを受けたり、あるいは不幸を受け、その理由が書いてある箇所です。このテキス

「神からのとがめを受ける」エレミヤ

トから考えてみたい、と思うのです。

“御子を信じる者はさばかれない（とがめられない）。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかっている（とがめられている）。”

この箇所ではある人は神のとがめを受け、ある人はそのような神からのとがめを受けない人生を歩んでいることが書かれています。聖書を一読するとわかることですが、私たちの人生ははっきり言って、神しだいなのです。私たちが神からとがめを受けていなければ、幸せですが、もし、とがめを受けているなら、ろくなことはありません。

聖書によるならば、私たちの肉体もそして、動物も植物も月も星も神により創造され、またコントロールされています。ですので、私たちのいわば生死の鍵を扱っておられる神様から、もし我々がとがめや憎しみや怒りを受けているとするなら、私たちの人生はろくなものになりません。幸せで何の問題もない、などということはないし、ありえないのです。

このことは会社にたとえれば、わかるでしょうか。会社に入ったなら、会社で一番偉い人である社長の覚えがめでたい方がずっと良いです。逆に社長の覚えが悪くなり「あいつは遅刻は多いし、無断欠勤はするわ、たまに会社に来てもろくに働かない、顔があっても挨拶もしない」などと悪い印象をもたれるなら、リストラ候補の一番になってしまう可能性があるのです。会社に入ったら、社長から憎まれるより、気にいられたほうがよいことが待っているのです。

同じことは対神様に対してもいえるのです。私たちが私たちの生死さえ支配しておられる神様からのとがめや、怒りをかかっていて、それで、誰よりも幸せな人生、とは行かないのです。

“御子を信じる者はさばかれない（とがめら

れない）。”

ここには、私たちが神からのとがめを受けたりしないためにはどうすれば良いのかということが描かれています。そして、聖書は「御子を信じる者はさばかれない（とがめられない）。」ことを語ります。御子とは、神の唯一の子であるイエス・キリストのことです。

神はこの世の人を愛し、その助け、救いのためにたった一人しかいない子であるイエス・キリストをこの世に送ったのです。その神の意を理解し、悟りそしてそのキリストを信じる人は、いわば神のプレゼントを無にしない人です。それで、神はその人をとがめたり、怒りをもったりはしないということが書かれています。

“信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかっている（とがめられている）。”

ここには、逆に神のひとり子であるイエス・キリストを受入れることをせず、神の好意やプレゼントを無にする人々に対して、それらの人は、神のとがめを受けることが書かれています。「すでにさばかっている（すでにとがめられている）」とあるように、私たちがこの神のひとり子であるキリストを信じていない場合、私たちはすでにもう神のとがめや、怒りの下にあることが書かれています。以下の記述はこのことを説明している箇所です。

ルカ13:1 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。

13:2 イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとも思うのですか。」

「神からのとがめを受ける」エレミヤ

13:3 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。

13:4 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。

13:5 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

ここでは、シロアムの塔が倒れたとき、いわば偶然の事故で命を失った人について書かれています。彼らは神の特別な恵みをうけた歩みをしていた人々でなく、いわば神のとがめの中に歩んでいた人々でした。そして、彼らは、それらの偶然の事故から免れることなく、神の助けを受けることなく、命を失ったのです。彼らは神のとがめの中で生きており、また、神のひとり子、キリストを受け入れはしなかったのでしょうか。いかに神のとがめの中で生きることが不幸であるかがよくわかります。

さて、それと対照的な歩み、経験をした人もいます。災いの中でも神の愛顧を受け、守られた人です。パウロに関する以下の記述を見てください。

使徒28:2 島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。おりから雨が降りだして寒かったので、彼らは火をたいて私たちみなをもてなしてくれた。

28:3 パウロがひとかかえの柴をたばねて火にくべると、熱気のために、一匹のまむしがい出して来て、彼の手に取りついた。

28:4 島の人々は、この生き物がパウロの手

から下がっているのを見て、「この人はきっと人殺しだ。海からはのがれたが、正義の女神はこの人を生かしてはおかないのだ。」と互いに話し合った。

28:5 しかし、パウロは、その生き物を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。

28:6 島の人々は、彼が今にも、はれ上がって来るか、または、倒れて急死するだろうと待っていた。しかし、いくら待っても、彼に少しも変わった様子が見えないので、彼らは考えを変えて、「この人は神さまだ。」と言いだした。

ここでは、パウロが毒蛇であるまむしにかまれたことが書かれています。こんな目に会うことは不幸なことです。しかしキリストを信じており、神のとがめの下にいないパウロがその不幸の中でもなおかつ害を受けず、逆に全く守られたことが書かれています。パウロは、神からのとがめの中で生きていたのではなく、逆に神からの祝福の中を生きており、神の愛顧の下で歩んでいました。それで、このような突発的な災いの中でも守られ、命を守られたのです。確かに神のことばの通り、「御子を信じる者はさばかれない（とがめられない）」のです。私たちもこのように歩むこと、神からのとがめや怒りの下に歩まないことが幸いをもたらすことを知しましょう。
—以上—



まむしの害から守られたパウロ

進化論の誤り20:進化論を否定する証拠は採用されない

今まで見てきたように、進化論はあらゆる面で、矛盾のある理論でありちっとも科学的ではなく、偽りと誤りに満ちています。しかしこの理論は今でも科学的であるとされ、

大いに人々に受け入れられています。進化論に連なる人々は不正直であり、進化論の証拠とされるものの中には多くの偽りの証拠があります。そして、さらにもう一つのことがあります。彼ら進化論者は、進化論と矛盾した証拠には、目を通さない、耳を傾けない、それを無視し、またそのような証拠を語る科学者を、追放させます。以下の記事を見てください。

<反進化論の証拠は隠された>

1880年、アメリカのカリフォルニア州にあるタイボ山の麓で、多くの精巧な石器工具が出土した。専門家の鑑定では、5500万年前の遺跡であることが確認された。この事実は、進化論の人類進化説を完全にくつがえした。

しかし驚くべきことに、この重大な発見は、まもなく人々に「忘れ去られてしまった」のである。既に既成事実となった理論の真偽が問題になったとき、人々は、常に自分が信じてきたことを疑うことさえもせず、たとえ、それが事実であっても、否定、又は無視するのである。

1966年、メキシコのホヤリックで幾つかの鉄槍が出土した。アメリカの地質学者マッキン・テーア博士が、二つの方法で鉄槍が作られた年代を鑑定したところ、二つの方法のいずれにも、一致した結果が得られた。「出土した鉄槍は、今から25万年前のものと判明した」のである。しかし、進化論に相反するこの結果は科学界に受け入れられず、あるヨーロッパの学者が圧力に屈して、鉄槍の作られた年代を人々が受け入れられるように書き換

えた。その後、当時すでに国際的知名度の高かったマッキン・テーア教授は、関係領域における仕事の機会を全て失った。

今は亡くなった考古学者アメンダも同じ羽目に遭遇した。メキシコのプレラワ城で、ある先史時代の動物の額骨を発見した彼は、額骨の中に入っていた一つの鉄槍の先端を鑑定したところ、これは26万年前の武器であることが分かった。しかし、この驚くべき発見は、幾つかの雑誌に公開された後、権威者たちの批判を招いたために、アメンダの仕事と人生は抹殺された。

このように明確な事実を否定するケースは、まだまだたくさんある。これらの事例の様に、少数の権威者が大衆の思考を奪い取り、権威によって作られた科学世論が人々の常識となっていることがわかる。真実を知る機会のない大衆は、権威者の主張を無条件に受け入れることしかできず、科学はすでに信仰の一つに変質してしまった。

しかし時間の流れにつれて、進化論をくつがえす問題も増えつづけている。一部の進化論学者たちが事実に基づいて、進化論に対し疑問を投げかけ始めた。勿論、この反論は経験による批判を招いた。しかし、否定しようのない事実が人々を困惑させている。



一億年前の地層から見つかったハンマー

聖書と日本語 「豚に真珠」

聖書は日本人にとってあまりなじみのないものかもしれません。しかし実はそうでもないのです。聖書の世界を日本の生活の中から探し出してみたいと思います。

聖書と日本語

「豚に真珠」

「猫に小判とか、豚に真珠」という言葉を聞くことがあります。これらの言葉の意味は、価値のわからない者に価値ある物をあたえても意味がないということで用いられます。この「豚」についてですが、今でこそ日本は養豚がさかんですが、昔は飼われていませんので、ことわざにいきなり豚が出てくるのは不思議な感じがします。

実は、この「豚に真珠」ということわざは、実は聖書が元になっているのです。これは新約聖書のマタイ伝7章6節がもとになっています。

マタイ7:6

聖なるものを犬に与えてはいけません。また、豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから。

イエス・キリストが2000年前に言われた、マタイ7章6節の言葉が元になり、豚に真珠ということわざができたのです。では、いったい豚という生き物は聖書においてどのような立場にあったかというところ、

旧約聖書レビ記

11:7それに豚。これはひずめが分かれており、ひずめが完全に割れたものであるが反芻しないので、あなたがたには汚れたものである。

とあるように、汚れた生き物として扱われています。

同じくレビ記の11:3~4では汚れていない聖い生き物の事が書かれています。

3動物のうちで、あなたがたが食べてもよい生き

物は、次のとおりである。

4動物のうちでひずめが分かれ、そのひずめが完全に割れているもの、また反芻するものはすべて、食べてもよい。

ひずめが分かれて完全に割れており、反芻する生き物は羊や牛です。羊や牛は、聖書では聖い生き物として書かれています。かわいそうなのですが豚は汚れた生き物として書かれています。しかし旧約聖書の動物に関してのことは、たとえとしての意味合いが含まれています。

聖書では、人の事を羊に例えることが多くあります。「神の子羊」はイエス・キリストの事です。「主は私の羊飼い」という言葉もあります。このように、羊や牛は神を信じる民もたとえでもあるのです。そして、ひずめが完全に割れて分かれているとは、神の民としてこの世の中から完全に分かれて過ごしているということ。この世の中の価値観ではなく神様の言葉を中心に生活を送るということです。そして反芻するというのは、聖書を反芻するように日々読んでいくということにつながるのです。それでは、「豚に真珠を投げる」とはどういうことなのでしょう？ここでの真珠とは、聖い神様の霊のことです。真珠のように大切な物として、たとえられる神様の聖なるもの、聖霊を、その価値がわからない人、汚れた状態の人に無造作に投げてしまふ、渡してしまつてはならない、ということでしょう。身近なことわざの中にも聖書の深い意味が含まれているのです。



豚に真珠

詩篇を読む:「神さまは苦難から守ってくださる方」

〔聖書箇所〕

詩編46:1~3

1神は、われらの避け所、また力
苦しむとき、そこにある助け
2それゆえ、われらは恐れない
たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうと
も。
3たとい、その水が立騒ぎ、あわだっても、
その水かさが増して山々が揺れ動いても。

マルチン・ルターという名前を聞いたことがある人は多いと思います。世界史に必ず出てくる宗教改革の中心人物です。ルターは今から約500年前のドイツで、腐敗したローマ・カトリックに対し命がけで宗教改革を進めました。彼は、たくさんの賛美歌を作りました。そのなかに詩編46編をもとに作った賛美歌「神はわが砦」(または「神は我がやぐら」)というものがあります。

ドイツ語の歌詞では「私達の神は堅き砦、よき守り、そして武器である。神は我々に降りかかるあらゆる苦難から私たちを助けて自由にしてくれる。」とあります。

ルターは命の危険にさらされながらも宗教改革を成し遂げたのですが、その原動力となったのは、神様への信頼です。

46:2~3節では、たとえ、山が海の真ん中に移り、水が山を揺り動かすほどの天変地異が起こったとしても恐れないと。あります。

神様は、避けどころとなって、砦のようになって、圧倒的な力であらゆる苦難から守ってくださるということをルターは信じたのです。

また、神様が砦であるという言葉は、聖書にいくつも書かれています。

詩編9:9

主は、しいたげられた者のとりで、苦しみの時のとりで

詩編18:2~3

2主は、わが巖、わがとりで、わが救い主
身を避けるわが岩、わが神、
わが盾、わが救いの角、わがやぐら
3ほめたたえられる方、この方を呼び求めると私は敵から救われる。

砦というのは、外敵の攻撃を防ぐための建造物、要塞のことですが、人間が作った不完全な砦なのではなく、神ご自身が砦であるということが重要なのです。絶対的な砦である神様を信頼していくなれば必ず守られるのです。

ルター自身も守られました。そして、そのことはルターだけのことではありません。神様は、主を信じる一人一人に対しても砦のようになって苦難の時にも守ってくださるのです。



神さまは苦難から守ってくださる方

キリストを信じた体験談:「不思議な助け」フィベ

イエス・キリストを救い主として受け入れ、洗礼を米国で受けてから20年近くたちました。そして、その当時の事を思い起こしながら、月刊バイブルでいくつかお話しさせていただきました。昔の出来事を振り返り思うことは、祈りは聞かれ、助けを求める者に神様は必ず答えてくれる、ということです。

詩編121:1~2

私は山に向かって目を上げる。

わたしの助けはどこから来るのだろうか。

私の助けは天地を造られた主から来る。

本当に神様は、助け主であり、祈り求める時、即座に答えられ実際に助けてくださるのです。

でもそのことを、最初から理解していた訳ではありませんでした。まだ、未信者の時、米国で教会の英語の無料クラスに通っていた頃のことです。英語の先生が、神様に守られたことを話してくれました。高速道路で、彼女の車がスリップし、何回転もスピンしたそうです。その際必死でお祈りし、車は、反対車線に飛び出さず、ほかの車と衝突もせず、進行方向にピタリと車が停止したそうです。神様が助けてくれたのだと喜んでおられました。しかし、その話を聞いたとき、本当によかったと思いましたが神様の助けとは思えなかったのです。幸運だったとしか思えませんでした。神様の助けということが、よくわからなかったのです。

しかしその後、自分が洗礼を受け、神様に祈り求め始めたとき、神の守りが本当であることを理解しました。ひとつずつ体感していききました。まるで体験学習のように・・・。その中のひとつが、以前ここでも書かせて頂いた米国での息子の入院の事です。息子が幼稚園の時、咽喉に金属が刺さり深夜に緊急手術をしました。手術は無事に済みましたが、専門の病院に移動しなければならず、救急車でかなり離れた病院に移動しました。病院で1泊し、友人宅で預かってもらっている上の娘の迎えるため、自宅に戻るようになりました。移動手段の自分の車は・・・。前の病院

の駐車場に置いたままです。頼りの夫も、まだ病院に来ていません。当時住んでいた米国南部は、電車や地下鉄は存在せず、バスもほとんどなく、各人に車がないと生活は不可能なところでした。タクシーで移動するしか選択肢はありませんでした。ここではタクシーは空港以外で見ることなく、電話で呼ばねばなりません。米国でタクシーに乗ったこともなく、英語が苦手な私にいきなりできるはずありません。途方に暮れ、病院の周りをウロウロしながら懸命にタクシーを探しましたが見つかりません。「主よ、どうしようもありません。助けてください。」と心の中で助けを求めています。その時、病院のスタッフの親切な青年が私に声をかけてくれました。そして彼は英語ができない私の為にわざわざタクシーを呼んでくれました。本当に祈りが聞かれたと思いました。そして無事タクシーに乗りましたが夕刻となり周囲は薄暗く、運転手は強面で屈強な黒人の方でした。心細くなりながら、行先を、〇〇病院だと告げると、「なぜ病院から病院へ移動するのか？」と聞かれました。それで、片言の英語で息子の手術の事、救急車で移動したために車を病院においたままだと話しました。彼は私が片言の英語にも関わらず親切に話を聞いてくれました。30分ほどして、駐車場に着いた時、周囲は真っ暗でした。とんでもなく広い駐車場で、自分の車がどこなのか全く分かりませんでした。すると、彼は時間をかけ一緒に車を探してくれました。そして帰りぎわに「自分はクリスチャンで、あなたの息子の回復の為に祈りするよ。」と言ってくれたのでした。主により頼み、助けを求めるとき、即座に神様は助け手を送られ、助けてくださるのだと知った忘れることのできない出来事です。

イザヤ41:10

恐れるな。わたしがあなたの神だから、
わたしはあなたを強め、あなたを助け
わたしの義の右の手で、あなたを守る。

聖書に関する偉人のことば:三笠宮崇仁殿下



三笠宮崇仁殿下みかさのみやかひと（大正天皇第四皇子、今上陛下の叔父上）：

「私は戦時中に敵を知ろうと、キリスト教を調べ聖書にぶつかった。初めは文明を誇る白人がなぜこんなものを信じるのかと笑ったが、聖書が歴史的事実と知ったとき、聖書から離れられなくなった。」

※ 三笠宮殿下は、古代オリエントを専門とする歴史学者として有名。この言葉は殿下がなぜ歴史を学ぶようになったかについて述べたときのもの。

<お知らせコーナー>

●聖書贈呈プレゼント！

月刊バイブルお読みになっていかがでしたか？少し、聖書に興味をわいてきましたでしょうか？このたび、当教会では聖書贈呈、プレゼントを行っています。この機会に聖書をあなたも読んでみませんか？ご興味がありましたら、ぜひ、お申し込みください。

以下を記載の上、mail:truth216@nifty.comもしくはfax:020-4623-5255もしくはtel:042-364-2327へ連絡ください。

郵便番号:

住所:

名前:

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日/午前 10:30-12:30,午後 14:00-16:00

場所:東京都、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館 (tel:042-

1F のエレベーター脇の部屋表示板で、「レムナントキリスト教会」の部

どなたでも来会歓迎、入場無料です。tel:042-364-2327, mail:truth216@nifty.com



★教会のHPもあります。

ご興味のある方は、“Yahoo! Japan”で、「府中 レムナントキリスト教会」で検索ください。

尚、レムナントキリスト教会はプロテスタントの教会です。ものみの塔や統一教会とは関係ありません。

☆クリスチャンになったばかりの方やノンクリスチャンの方におすすめのサイト:オリーブ&ミルトス

<http://remnantnotudoi.jimdo.com/>

☆ノンクリスチャン向けへのブログサイト:パンの家

<http://87494333.at.webry.info/>

☆クリスチャンの方におすすめのサイト:エレミヤの部屋

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/6810/>

☆クリスチャン向けへのブログサイト:終末の風

<http://whattopics.at.webry.info/>